琉球大学学術リポジトリ

討論会「サトウキビの総合利用は可能か」の開催に当たって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國府田, 佳弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017541

討論会

「サトウキビの総合利用は可能か」

の開催に当たって

琉球大学農学部　國府田佳弘

サトウキビ産業の窮状は沖縄だけの問題でなく、世界各地のサトウ生産地域が抱えている問題であります。その窮状も様々でフィリピンのネグロス島におけるような甚だしいものからブラジルのように若干の活路を見いだしているところもあります。サトウキビ産業が苦しくなってきた原因はいろいろと言われております。食生活の変化による砂糖離れ、異性化糖に代表される新たな安価な甘味資源の登場等々であります。これに円高の追討ちを受けて国産の糖価は外国製品の１０倍にも余ろうかという事態になっております。

それでは、サトウキビの生産は縮少の運命にあるのでしょうか。沖縄の農業がサトウキビの生産を基幹としていることからサトウキビの価格の抑制、生産の低下が県経済に与える影響は甚大でありますが、そうでなくても私はサトウキビは決して生産縮少すべき作物ではないと思います。生産に限界のある無機原料から、再生可能な生物資源に頼らなければならなくなってくるということは広く論じられているところであります。サトウキビは衆知のようにＣ４植物であり、太陽エネルギーを物質に変える効率の高い作物です。しかも、生物材料を原料にしようとするときに通常最大のネックとなるのはいかに効率よく原料を収集するかというところにありますが、サトウキビの場合はそのシステムが完全にできているのです。要は蔗糖だけに頼らずサトウキビを徹底的に利用し、しかも付加価値の高い産物を得るところにあります。

このような考えは今に始まったことではありません。九州大学名誉教授の山藤一雄博士が台湾製糖の技師であったころに、将来の製糖産業を見通して昭和１５年にサトウキビの副産物の高度利用を提唱しておられます。このため現在の台湾糖業ではささやかではありますが、総合利用の形ができております。沖縄県におきましてもここ数年来この考え方の必要性は論じられ、昭和５９年に当時の開発庁長官の中西長官がリーダーシップをとり県知事も参加されたシンポジウムにおいて本日のパネラーの一人である照屋輝一氏からかなり具体的な形で提唱されており、また県農試におきましても検討さ

れ、一部具体的な研究に入っていると伺っております。また、琉球大学、神戸大学、宮崎大学、東京農工大学の研究者が共同で若干の取り組みを行っております。

しかし、現実には副産物の徹底利用のシステムが実現する気配は感じられません。サトウキビの生産地域は米国（ハワイ）、日本を除けばいずれも発展途上国にあります。我が国でも本県と鹿児島県の一部だけで栽培されており、沖縄県が自らこのシステム開発に当たらなければならないでしょう。

それではこの課題の実現が進まないのはなぜでしょうか。また実現が可能なのでありましょうか。可能であれば誰がそれに当たるべきものでありましょうか。本日はこの辺のところを技術的立場から、工場側から、またキビ生産者の立場からお話いただき、これに基づいて参加者の皆様の徹底的な討論をお願いしたいと存じます。